

第5回住宅建築賞 審査講評

★応募作品30点中、第1次審査で各審査員が選考した5~6作品についての講評

大城元臣(沖縄県建築士会会長・審査委員長)

作品No.9 「2つのオープンスペースを持つ家」

プランがシンプルで平均的家族に計画しやすい。家族の時代にともなう生活スタイルを考慮しており、生活のストーリーがある。

作品No.10 「子供と一緒に育つ家」

No.9 の推奨と同じで単純な計画が好ましい。

作品No.12 「三角の家」

三角形の困難な敷地形状を巧みな設計手法でシンプルに解決し、デザイン的にも優れている。

作品No.15 「Collector's HOME」(収集家の家)

住宅において鉄骨造そのものを活かして一つの住まい方の提案と思われる。クライアントの注文への考え方も建築家としての姿勢として注目する。

作品No.21 「生きものと一緒に棲み家」

木造工法の巧みさが際立つ。幼少の頃の探検心をかきたてられる様で、住まいの夢である。

金城義治(日本建築家協会沖縄支部副支部長)

作品No.5 「K邸」(半戸外的屋内を内包する都市住居)

都市型住宅の一つの解である。開口の狭い敷地・動線が軸線で構成されている。プランニングにおいて、居室と動線の融合を計ることで新しい展開がありそう。

作品No.9 「2つのオープンスペースを持つ家」

モダンでオシャレな間取、外観の表情がすがすがしい。ライフサイクルの提案があり、様々な生活パターンが楽しめる。

作品No.15 「Collector's HOME」(収集家の家)

二世帯住宅である。県内でよく目にする住宅の間取や外観にちがいがあり何か目新しい作品である。開放的で、おおらかな表情をつくり出している外観。透してみせる内部が評価の対象であった。第一次審査より最終審査までこだわった作品である。勇気のいる提案とクライアントの住み方に対する努力を期待して。

作品No.21 「生きのと一緒の棲み家」

10点の木造住宅の中で、一押の作品である。傾斜地を生かし、敷地のコンタを利用したプログラム分散型配置等が心地よい。建物全体のロケーション、楽しそうな空間、住んでみたい。これが“すまい”である。断面構成の中で床レベルを多用することでより豊かな空間の演出がで

きたのでは、床束と基礎部分に一工夫ほしかった。

作品No.25 「スケッチの小さな家」(スマール・ラグジュアリーハウス)

「クライアントの理想を形にした」と設計者の弁である。設計者の本音が心地よいひびき、全体的に小ぶりに見え印象がよい。

作品No.30 「包込む家」

居住部分を壁面を利用したカーブで包込む、外部の領域を取り込み LDK と一体感を演出している。R型の壁面より突出した一部の直角な箱が力強く印象的である。

下地信夫(沖縄県建築士会副会長)

作品No.1 「繋がる空間・集う家」

きっと、ご近所の顔見知りが行き交うロケーションなのでしょう。車庫及び諸室の配置、深い土間庇、建具、空間の質感等共感できる作品です。

作品No.6 「空を掘んだ家…」

好感の持てる内容で「空を掘んだ」には共感できます。ただし、二層以下のトップライトで直射日光の侵食では、目眩がします。私は、開口部は内部より「穿つ」という意識のほうが強いのですが。

作品No.19 「HOUSE-G」

形の造り込みも「程々」で、階段及び玄関口へのアプローチの手法は、新鮮で好感が持てます。

作品No.21 「生きものと一緒に棲み家」

一瞬これ「住宅」?と 疑いました。

「ロケーション」、「木造」、「赤瓦」、「ビオトープ」、「教育」のキーワードで、なるようになつた「過剰に造り込まない」作品で、沖縄人のマインドが刺激されます。

応募者が建築主であること、今までにないケースでしょう。

作品No.28 「混構造の家-現代的手法で造る沖縄の民家」

日常生活に必要な「場」が程々に配置され、室内に過剰にコンクリートが露出せず、手堅い納まりで好感が持てる設計です。

今度は、「畳」を床材として用いてみたらどうでしょうか。

ところで、混構造を用いることが現代的なのか、混構造を現代的な手法で造ったのか、どちらでしょうか?

※全体をとおしての印象ですが、ペーパー上のビジュアル及び内容とも年々向上しているように感じました。

田盛隆博(建築士会建築設計競技委員会委員)

作品No.2 「為又の家」

与えられたプログラムを単純に構成し明快である。また住居部分に配されたコートが効果的で天空やサイドからの光あふれる空間に魅力を感じた。

作品No.12 「三角の家」

敷地条件の厳しい中で形状に逆らわずまとめられている。形状から発生するデットスペースは色々な空間をつくりだし、家の中を回遊する中で 楽しさを生んでいるように感じた。

作品No.15 「Collector's HOME」(収集家の家)

構造体をあらわした明快な構成が目を引く建物である。

大きく開いた開口部は大胆で、実際に住んでいる雰囲気を見てみたいと興味がある。

現代住宅の流れなのか、疑問も感じますが…

作品No.28 「混構造の家-現代的手法で造る沖縄の民家」

内部の木造空間が落ち着いた生活感を漂わせ、シンプルな空間構成が目を引いた。

外観は至ってシンプルだが、内外の相反する素材感(よくあるパターンだか)がなぜか惹かれる。

作品No.29 「砂辺の家」

プログラムと空間構成から外観が生まれるバランスのとれたシンプルさが目をひく。

平面構成と断面及び外観デザインが一体となった魅力ある(反面派手さがない)建物である。

根路銘安史(第4回住宅建築賞 住宅建築大賞受賞)

作品No.1 「繋がる空間・集う家」

施主の要望 『幼い頃の楽しい記憶の沖縄の家』を土間の琉球石灰岩や、赤瓦、木建具等の素材感と原風景としての空間の大きさや、居室の構成をうまくまとめています。長方形の敷地に、方位に忠実に軸線を振って空間を構成し、太陽光線の配慮や、道路からの視線、アプローチの導入や、角度を振ったことで庭の奥行きを感じさせています。素朴に見えますが、設計者の繊細な気配りを感じました。

作品No.5 「半戸外的屋内を内包する都市住居」

沖縄型都市住宅として、駐車台数を確保し、土地の有効利用と住環境を考慮しています。

縦動線と吹抜けのある半戸外空間は、光と風を取り込みプライバシーを確保しながらのオープンな生活ができます。スージの様なこの半戸外的屋内空間は、東南アジア（沖縄）的な開放的生活を都市の中で可能とした提案を評価しました。

作品No.12 「三角の家」

三角形の敷地をうまくプランニングした都市の住宅です。

敷地のポテンシャルを最大限に利用し、シンプルな外観と、デザインされた開口部、設計者の力量が發揮された美しい作品です。

作品No.15 「Collector's HOME」

これまでの沖縄のRC住宅から脱皮した、鉄骨造で、オープンな住宅です。

収集家の家として、物に負けないシンプルな家を、大きな開口部を設けた箱として表現しています。この家は、ドールハウスのように、住み手もまた展示物の一つとして存在し、生活する。住み手の自由で、多様な表現力によって、変化する楽しさがあります。

作品No.26 「フク木に囲まれた白いマッス」

沖縄の民家の配置を取り入れ、ナー（庭）を中心とした平面計画です。住宅としてのパブリックとプライベート空間と、ピアノレッスンルームからの音や視線の配慮等、外部空間をうまく取り込み解決しています。古い井戸を再利用した、水の流れの演出は、水の音や、波紋の光の反射などと、フク木の濃い緑と、芝の若草色、背景としての建物が、日々の生活の中に安らぎや、新しい発見、住み手の五感を刺激させる、潤いある生活が想像できます。

山城一美(沖縄県建築士会まちづくり委員長)

作品No.5 「K邸」(半戸外的屋内を内包する都市住居)

限定的な敷地条件の中で所要の諸室を各層に配した点、面積の配分上、連絡は堅の通路（階段）にならざるを得ないが、通風計画、光の取り入れ方等隨所に工夫が見られる。宅地の細分化、狭小化の傾向にある都市部において設計者の力量が楽しい都市居住の拠点を創出している好例である。

作品No.8 「生まれる余裕と豊かさ」

沖縄の気候・風土・文化等に考慮した住宅建築である。ハード面では、混構造（RC造+木造）、材料（赤瓦、自然素材）、屋内空間・屋外空間の連続性、雨端空間…。ソフト面では、世代間交流、子から孫への継承…。通風、採光上、子供室の横長開口はどうなのかな、少し気になった。

作品No.15 「Collector's HOME」(収集家の家)

家づくりは依頼主との共同作業なので、諸々の要望を満たし、設計者の想いがある程度表現できていれば、幸せな結婚といえそうで、メタシメタシとなる。住めば都とはいうけれど、沖縄の気候風土の中で居住性はどうなのだろうと、人ごとながら気になった。

作品No.21 「生きものと一緒に棲み家～暮らしに命の風を吹き込んだら、元気になるよ～」

わ～い！わ～い！と子どもたちの元気な声が、聞こえてきそうな住宅である。この住宅は住むだけでなく環境教育の場として、提案していることに特徴がある。この恵まれた住環境で育つ子どもたち（次世代を担う子どもたち）の今後が楽しみである。これも建築が果たしていくべき重要な役割・使命であろうか。

作品No.22 「市松の家」

デザイン・構造・設備を一体的に考えた取り組みとして注目に値する住宅建築であると考えられる。ただ、図面（方位）からは市松壁が西日対策にはなっていないようなので、温熱環境調整にどの程度の効果があるのかはよくわからない。ダブルスキンを透過してくる光が、どのようなものなのか興味のあるところである。

作品No.26 「フク木に囲まれた白いマッス」

中庭を中心とした自己完結的な心地よい内部空間に仕上がっているように感じられる。古いウチナーンチュなのか福木との取り合わせは上江州家、銘苅家、そして、中村家などが脳裏に浮かんでしまう。洗練されたデザイン、地域の素材が多用されているが、建築はカルフォルニア モダニズムを連想してしまう。